

〈研究ノート〉

カムユカラにえがかれるサケとシカ
— 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』を中心に —

岡田 勇 樹

1. はじめに

現代の日本に生きていると飢饉は縁遠いものであると考えがちであるが、かつて和人にとっても、アイヌにとっても身近な脅威であった。言うまでもなく、飢饉になると否応なしにその命が危険に晒されるからである。そういったこともあってか、飢饉をテーマにしたアイヌ口承文芸も多く存在する。『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』の中で久保寺は「主体神が変わっても、このように、飢饉を救う話は類型もしくは異伝が多い」（久保寺 1977：338）と書いている。

アイヌにとっての飢饉を久保寺は「狩猟・漁撈を生活の中心とした、かつてのアイヌにとっては、川でサケやマスの漁の乏しいことは、山で鹿や熊の獲れないことと同様、直ちに飢饉を意味し、かかる年を凶年 *kem-ram* としたのである」（前掲書）と述べている。アイヌの主食はサケやシカであったのだ。アイヌ口承文芸に登場する際にも、サケとシカが対で登場することが比較的多い。

更科源蔵は「これほど大事な鹿であるが、それがあまりに澤山居り然も容易に獲ることが出来たので、鹿自身は神様ではなくて、鹿の多い少いは天に在つてその移動を指揮する、ユクッテカムイ¹（ママ）といふ神様の意志によるものであるとして、その神様は機嫌を悪くしない程度に、肉を受けとつた鹿の頭の骨に小さな幣を一つつけて、大木の根元などへガラガラと重ねて置いた」（更科 1942：109）とし、たびたびアイヌ研究においてその考え方はたびたび参照されることとなる。

久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』に収録されている様々なアイヌ口承文芸の中に、更科が指摘した根拠と思われる飢饉をテーマとした神謡（カムイユカラ）がある。

1 シカは鹿主の神（ユッコロカムイ、ユカッテカムイ）、サケは魚主の神（チェブコロカムイ、チェパッテカムイ）がもたらすものだと物語の中では語られている。

本稿ではその中から「神謡 74 狩猟の媛神の自叙」「神謡 75 狩猟の媛神の自叙」「神謡 81 水の女神，神なる淑女の自叙」を比較・概観し，アイヌの主食であったサケとシカが神謡にどのようにえがかれているかを考察したい。

2. 神謡 74 にえがかれるサケとシカ

久保寺が日本語でのあらすじを作成しているので下記に引用する。

〔第1段〕狩猟の女神は神の国に在って，絶えず人間の許より捧げられる木幣や酒などを以て，神々を招じて，饗宴を催おすのを常としていたが，或る時から，人間の届け物が間遠に，途絶え勝ちになったので，心を痛めている。

〔第2段〕或る日，人間の許から大杯が届き，酒箸が，人間の村は飢饉で窮乏しているので救援をしてくれるように伝言をする。

〔第3段〕狩猟の女神は，人間の許より届いた酒をもって饗宴を催おし，神々を招待して人間の村の飢饉を救うことを計る。

狩猟の女神は魚主の神には魚を，鹿主の神には鹿を，人間界に降してやるように頼んでも，彼らはそれぞれ，人間が魚や鹿を粗末な仕方ですべて殺して木幣も碌に与えず，その霊を送りかえず不敬不遜な態度をあげて，狩猟の女神の頼みをきかない。

狩猟の女神は起って巧みに舞い，神々を大笑いさせた。

仏頂面をしていた魚主の神もついに少し笑って，口から鱗をこぼし，鹿主の神は鹿毛をこぼす。

〔第4段〕すかさず，狩猟の女神はこぼれた魚鱗や鹿の毛をとって下界に吹き飛ばす。そこで川海には魚が，山原には鹿がみちみちるようになり，人間界は豊かな食物に恵まれるようになった。

〔第5段〕狩猟の神は人間たちから感謝されて，たびたび酒や木幣が届くようになる。また以前のように神々を招いて饗宴を催おし，神々からも感謝されるようになった。（久保寺 1977 : 338）

本来はサケにもシカにも木幣（イナウ）を与えて，敬意を持ってその霊を送り返すべきところを，アイヌはそれをしなかった。それに対して神々が怒ったことに端を発した飢饉の物語である。その窮状を聞いた狩猟の女神の活躍で飢饉は回復され，アイヌもまた神々への態度をあらためる。

アイヌからの供物が途絶えがちだったことに心を痛めていたところへの酒箸（イクバスイ）からの知らせがあり、狩猟の女神は行動に出るのである。これは単なる情けからのものではなかった。最終的にはアイヌが飢饉から救われるが、狩猟の女神への供物も届くようになり、狩猟の女神は神々からも感謝されるようになる。ここでえがかれているのはアイヌと神が互助関係にあるということである。

この物語でサケやシカは意思を持ったものとしてえがかれている。また、軽重はともかく、木幣を捧げる対象とされている。そして彼らへの礼儀を欠いて神の怒りを買ったのは他ならぬアイヌだった。その結末から分かるように、サケやシカを粗末に扱ってはいけないという教訓も含まれていると解釈するべきものであろう。

3. 神謡 75 にえがかれるサケとシカ

〔第1段〕 天空の国に棲む狩猟の女神の許へ、人間の許より酒杯が届き、その上に載せられた酒箸が人間の言葉を伝えて、飢饉の窮状を訴える。女神は、そしらぬ顔で、いつものように針仕事の手を休めない。

〔第2段〕 やがて、或る日、四十雀が神窓から飛び込んで来て、再び窮迫した人間界の飢饉を訴える。

〔第3段〕 狩猟の女神は、下界をふりかえって見て、飢饉の元兇は巨魔で、巨魔が川に網代をかけているためだと知った。そこで、酒を醸り、鹿主の神と魚主の神を招いて、したたかに酔わしめ、それぞれ踏舞した時、女神も起って踏舞し、鹿主の神の身体の毛と魚主の神の鱗とをそれぞれとって、下界に吹き飛ばし、魚や鹿を繁殖させて、人間の飢饉を救う。

〔第4段〕 それ以後、狩猟の女神は、人間から感謝の祀を受けて、いよいよ神格高い神となった。（久保寺 1977：344）

久保寺は神謡 74 の異伝としているが物語として「破綻」していると指摘している。

神謡 75 では、神謡 74 のように飢饉の原因はアイヌがサケやシカを粗末に扱ったからというわけではなく、巨魔の仕業である。そこで狩猟の女神が一計を案じ、飢饉を救うという筋である。神謡 74 と同じく、鹿主の神や魚主の神は登場するものの、巨魔との関係性が不明瞭であり、エピソードが欠落しているかのような印象すらある。網代をかけたのが飢饉の原因であるにもかかわらず、それ自体は全く解決していない。「破綻」の問題はさておき、サケやシカについては細かい描写はないが、この神謡でもそれらを得ることができないことが飢饉なのであり、神によってもたらされるものであることが分かる。

4. 神謡 81 にえがかれるサケとシカ

〔第1段〕毎日刺繍に専念して暮らす水の女神の許へ、或る日オキクルミから飢饉の窮状を訴えて、最後の食糧の稗でつくった酒と木幣とが届いた。

〔第2段〕水の女神はこの酒でもって、川口の瀬の神 *Chiwashi-kor kamui*、村主の梟神 *Kotan-kor kamui*、鹿主の神 *Yuk-kor kamui*、魚主の神 *Chep-kor kamui* 等を招待した。そして、鹿主の神や魚主の神に、人間界の窮乏を救ってやってくれるように頼む。鹿主の神は、人間たちは鹿を粗末に扱い、木幣も与えず投げ捨てるのが、腹に据えかねるから、鹿はみな倉の中にとじこめて出さぬようにしているという。魚主の神は、魚どもを人間たちは朽ちた木などで叩いて殺し、悪口をついてぶん投げたりするので、いままいしいから、俺も魚どもは残らず倉に入れて、出してやらないのだという。

そこで、水の女神は川口の瀬の女神と舞踏して、神々の心を和らげようと努める。

〔第3段〕水の女神は一方で踊りながら、その魂はぬけ出で、鹿主の神の家に行き、倉の戸を開けて、鹿を下界に山原に放って、魂はまたその身体に戻り宿った。川口の瀬の神の魂もまた抜け出で、魚主の神の家に至り、倉の戸を開け、魚の入った手提げを取り下ろして、川の上におちまかし、その魂は身体に戻り宿った。

こうして、人間界には、再び、鹿や魚がたくさん棲むようになり、人間は飢饉から救われた。鹿主の神・魚主の神も気づいたようだが、いまさら仕方がないので、だまっていた。

かくて饗宴も終わった。

〔第4段〕水の女神、オキクルミに一仔一細を夢で見せてやり、これから以後は、鹿や魚をとっても懇ろに取り扱うように、配下のものたちによく教訓するようにせよ、また鹿主の神・魚主の神にも、木幣と酒を供えて、汝が村人に代わって、お詫びするようにと教えてやった。

〔第5段〕鹿主の神や魚主の神は、お蔭で、眷属どもが人間からいい待遇を受けるようになったと、水の女神に感謝した。その後、オキクルミからは、いつも酒や木幣が届けられて、感謝のことばを述べられるのを常とした。

水の女神もそのため、いよいよ神としての貫禄が加わって、楽しい毎日を送った。(久保寺 1977 : 368)

物語の筋としては神謡 74 と同様である。アイヌの不敬に神が怒り、飢饉が起こり、それを水の女神が救うというものだ。狩猟の女神が水の女神に、神謡 74・75 では魚鱗や鹿毛がサケやシカになるとえがかれていたが、ここでは倉に入れて置かれているくらいで

きな差異は見られない。シカやサケがそれぞれ鹿主の神・魚主の神の眷属（a-utarihi）であることが分かる。そういったことからシカとサケを粗末に扱ってはいけないことがより強調されているともいえよう。

5. おわりに

このようにアイヌの大切な食糧・主食としてサケとシカは神謡に登場する。そこでは魚主の神や鹿主の神にもたらされるとえがかれてはいるものの、木幣を捧げ、粗末に扱ってはいけないという教訓とともに語られるのである。少なくとも神謡の中では敬意を持って接すれば食糧に恵まれ、不敬に接するのであれば飢饉になるといって差し支えないだろう。

萱野茂はシカについて「これはあまりにたくさんいるのと、食料として数多く殺すので、ついつい神として祭ることをしなかった。空気や光のように拝まなくても祭らなくても手に入るものと考えてしまったのであろう。したがって、「シカ送り」の話はまったく聞いたことはない。ただし、カムユカラ＝神が自らのことを語り、アイヌに注文をつけるたぐいの話の中では、シカも神として祭るように教えている」（萱野 2003：151）と述べている。

現在、アイヌはサケもシカも自由に獲ることはできない。そしてどちらもアイヌの主食ではなくなっている。しかし、毎年札幌豊平川河川敷で「新しい鮭を迎える儀式（アシリチェブノミ）」が行われているし、「シカ送り」やシカに関する何らかの儀式がされていてもいいはずである。物語と現実には差が見られる。

アイヌとサケ・シカに限らず、その他の動物との関係性は重要であるが、今後の課題としたい。

参考文献

- 萱野茂 2003『五つの心臓を持った神—アイヌの神作りと送り—』小峰書店
久保寺逸彦 1977『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店
更科源蔵 1942『コタン生物記』北方出版社